



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

ルツ記1章における文学的技巧

著者	岩寄 大悟
雑誌名	神学研究
号	66
ページ	43-59
発行年	2019-03-12
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027604

ルツ記 1 章における文学的技巧

岩 嵯 大 悟

はじめに

これまで多くの研究者や解釈者によって、ヘブライ語聖書の物語中の文学的傑作として文学的特質が高く評価されてきたように、ルツ記はさまざまな文学的技巧を用い、他の聖書テキストとの関連性や語句の含意を使用・示唆することで、豊かな物語世界を構築している。本稿では、主にナラトロジー（物語論）・物語批評／物語分析¹と間テキスト性の理論を中心とする文学理論を自覚的に援用し、ルツ記 1 章の物語世界を作り上げている文学的技巧を明らかにしたい。

これまでもそれぞれの註解書などの各所で文学的技巧について論じられているが、文学理論を自覚的に適用し、どのような箇所文学的技巧が用いられているかを論じたものはごく少数である。しかも、それらの諸研究ではルツ記全体での登場人物の性格や語りの視点、さらに物語全体の文学的特長を明らかにしようとするあまり、細部での分析がおろそかになっている点は否めない。しかも、文学的技巧は物語の一部分を分析する場合と物語全体で分析した場合では、その性格は異なるものとなる。その点で、本稿は物語の一部分（1 章のみ）に限定し、その文学的技巧がどのような効果を有するのかを示すものである。

1. 研究方法、前提、文学単元

まず、研究方法および前提とする事柄、ルツ記 1 章の文学単元の区分について確認しておきたい。

1-1. 研究方法

ナラトロジーや物語批評／物語分析が整理・体系化してきた理論は広範で多様なものがあるので、本稿ではこれまでの文学理論が整理してきた多様な内容のうち、語

¹ Narrative Criticism／Narrative Analysis

り、設定、登場人物、出来事にしばって検討していく。

A) 語りと設定

語り (narrating) とは、「一つないしそれ以上の事象を語ることあるいは述べること」だとされる²。これはしばしば「語り手」という物語上の機能によって行われる。その際に重要な点は、語りの視点である。視点とは「物語が語られる視点、すなわち物語を構成する登場人物、アクション、背景、出来事が読者に伝えられるための様式ないし遠近法³」を意味しており、語り手の視点によって語りは別様の仕方で行われることになる。

設定 (setting) とは「物語の諸事象が生起する時間的・空間的な情況」のことであり、「テキストにおいて目立つか目立たないか」や一貫性を有するか否か、「漠然としているか詳細を極めているか」という場合がある⁴。本稿では、主に時間と場所に関心を寄せて分析を行う。

B) 登場人物と言動

登場人物 (character) とは、「文学作品に登場する人物あるいは人格を指す」語で、「相対的に重要か重要でないか (テキストにおいて目立つかどうか)」「動態的か (変化する) 静態的か (変化しない)」などに分類される⁵。登場人物の言動はその性格や考え、感情などを考える上で重要な役割を果たしている。

本稿での分析は、単に言及されるのみの登場人物 (ヤハウエ=シャッダイ) は検討の対象とせず、物語に登場する人物に限定する。登場人物の言動に関する考察を行った研究として Saxegaard のものがあり⁷、プロットでの登場人物の役割などを論じている。

C) 出来事

出来事とは「～を行う」や「～が起きる」という形での「経過陳述 (process statement) によって、物語言説 (discourse) に示される状態 (state) の変化」のことで、それが動作主によってもたらされる場合には、行動 (action) あるいは行為 (act) となるものである⁸。

行動や行為から区別される出来事は語り手によりもたらされるので、語り手の情

2 [プリンス、2015：121]。

3 [川口+岡本、1998：123]。

4 [プリンス、1997：175－176]。

5 [チルダー+ヘンツィ、1998：96]

6 [プリンス、2015：33]。

7 [Saxegaard, 2010]。

8 [プリンス、2015：65－66]。

報・知見を知る上で、手掛かりとなる。

D) 間テキスト性

これら A) ～ C) の分析を行う際に、(読者志向型) 間テキスト性という考えを取り入れる。間テキスト性とは J. クリステヴァが M. バフチンの思想に着想を得、創出した文学理論であり、その後、ロラン・バルトラによって発展させられた。クリステヴァは作者の地平を想定していたが、ロラン・バルトラが発展させた理論では、読者に力点がありあらゆるテキストは引用のモザイクであり、「伝統的な文学史観に基づいた影響関係のことではなく、テキスト間の相互の記号体系」が「別の種類の言説の意味の上に重ね書きされる」こと⁹だとする。

1 - 2. 研究の前提

次に本稿で前提としている事柄について確認しておきたい。

第一に、本研究は、作者ではなくテキストに関心を寄せ、現在のテキストで語られる物語の技巧について議論を行う。ここでいうテキストとは作者から切り離された独立した存在である。¹⁰ 第二に、語り手は（実際にルツ記を書いた）作者でも文学理論で言われる「内包された作者 (implied author)」でもない。¹¹ 第三に、これら二つの前提から、作者の意図は議論の対象ではない。これはテキストがテキストと語り手が作者から切り離された結果、それらと作者を接続することができないからである。これらはテキスト論と呼ばれる（作者から独立した存在としての）テキストに関心を寄せる文学研究ではもはや自明とされることである。

さらに、本稿において個別に設定した前提として、第四に、2 章以降のルツ記は考慮に入れない。第五に伏線については 2 章以降の内容を踏まえる必要があるため論じない。この両者は、分析の範囲によって、文学的技巧が有する効果が異なるためである。

1 - 3. ルツ記 1 章の文学単位

最後にルツ記 1 章の文学単位について区分し、示しておきたい。ルツ記 1 章についてはこれまで 2 ～ 5 つの単位とするさまざまな区分が提案されている。特に 1 節から始まる文学単位の終りとして、5 節 (LaCocque, Linafeld, Pressler, Sakenfeld, Berlin など)、6 節 (Bush, Gray など)、7 節 (左近、柊など) がそれぞれ提案されている。本稿では、ルツ記 1 章を 1 - 5 節、6 - 18 節、19 - 22 節の三つに分割する区分を採

9 [川口+岡本、1998 : 62]。

10 [川口+岡本、1998 : 185]。

11 [プリンス、2015 : 135 - 136]。

用する。これは、1 節から始まる説明が語り手による物語の前提の提示を行っていると考え、1 節から 5 節まで一つの単位とし、続く 6 節から具体的に登場人物—特にルツ記で重要な役割を果たす女性たち—の行動を描写するものとして 1 – 5 節とは別の単位とする。この単位はナオミがモアブを出発しベツレヘムに至る道中の描写であるので 6 節から 18 節までを一つの単位とし、ナオミとルツのベツレヘムへの到着とベツレヘムの町の反応を語る 19 節から 22 節までを一つの単位とするものである。本稿では、この区分に従って各単位での文学的技巧を検討していく。

2. 単位 1 : 1 ~ 5 節

この部分では、ルツ記全体の物語の前提や背景となる状況設定である情報が提示される。¹² このため、ナラトロジーの用語で「提示部 (exposition)」と呼ばれるものに該当する。¹³ また、登場人物の独白や会話文は含まれておらず、語り手のみが発言しており、いつ、だれが、どこで、なぜ、どうしたのか、という各点が語られている。¹⁴

A. 語りと設定

この単位では、物語の発端となる部分として、語り手によって必要な情報が開示されている。

①時間

この箇所では、時間を示す記述として、a) 士師たちが治めていた時代 (1 節)、b) 約十年の経過 (4 節) が語られる。

a) 士師たちが治めていた時代

ルツ記では、「歴史的」な描写から物語が開始される。これは、ルツ記 1 章以降の物語全体を「士師が治めていた時代」(1 節) へと置くことになる。他方、通常聖書ヘブライ語では「……の時代 (日々)」には、例えば「アムラフェル」(創 14: 1) や「アハスエルス」(エス 1: 1) のように、特定の個人名が入る。¹⁵ このことは、物語を「昔話」として伝える効果を有している。¹⁶ このことから語り手も物語も記述の年代や歴史性を厳密に示そうとはしていない。¹⁷

¹² [Zakovitch, 2010: 394] 参照。

¹³ [Ska, 1990: 25]。

¹⁴ [Yee, 2014: 352]。

¹⁵ [Slotki, 1946: 41]。

¹⁶ [Sakenfeld, 1999: 17]。他方、Sasson はこの見解に反対している。[Sasson, 1979: 14-15]。

¹⁷ [Morris, 1968: 236]。

b) 約十年経った

この期間は何を起点とするのかが明示されていないが、「エリメレク」の死後に語られる「彼らが住んだ期間」のため、考えられる可能性としては結婚から 10 年ほど¹⁸だろう。このことから、二人が「不妊の女性」¹⁹であったことが含意されている。

②場所

この單元では、a) ユダのベツレヘム、b) エフラタ、c) モアブという 3 つの地名が言及されている。

a) ユダのベツレヘム

ベツレヘムという町の名前は、ヘブライ語聖書中に 41 回使用されており、ゼブロン族の土地にも同じ名前の町がある（ヨシュ 19：15）ので、「ユダの」を冠して呼ばれている。²⁰

ベツレヘムはしばしば「パンの家」を意味するとされる²¹。しかし、この物語の冒頭（1：1）ではそのような穀倉地帯であるベツレヘムが飢饉に見舞われることが記されており、地名が含意する意味と現実の描写の間にギャップを生じさせる。²²

また、このベツレヘムは単なる穀倉地帯として有名であるのみならず、ダビデの町としても著名であり、積極的意味を有する。²³

b) エフラタ／エフラタの

「エフラタ」という名詞形では 8 例、「エフラタの／エフラタ人の」という形容詞形では 5 例使用されている。²⁴ エフラタは「穀物の地」を意味する語であるが、ヘブライ語聖書では多様な意味を指すものとして使用される。²⁵ この語は 3 つの可能性が指摘されている。1) ベツレヘムの部族名²⁷ = ユダ族の下位集団の名前、²⁸ 2) ベツレヘム周

18 [Trible, 1978: 167]。

19 [Levine, 1994: 79]。

20 [LaCocque, 2004: 38, n. 11]。[Alter, 2015: 61] も参照。

21 [月 本, 1984a : 40]、[柊, 1996 : 478]、[Sakenfeld, 1999: 19]、[Pressler, 2002: 267]、[石 川, 2003 : 116]、[Zakovitch, 2010: 394]、[Alter, 2015: 61]。

22 [Zakovitch, 2010: 394] を参照。Zakovitch は「アイロニー的な註記 (an ironic note)」でルツ記は始まるとする。石川立はベツレヘムで飢饉が生じたことを「言葉遊び」[石川, 2003 : 116] と、Reinharz は「だじゃれ (puns)」[Reinharz, 2014: 1574] とする。

23 [Pressler, 2002: 267]。

24 Even-Shoshan による。

25 [柊, 1996 : 478]。

26 [Pressler, 2002: 267]。

27 [石川, 2003 : 116]。

28 [Sakenfeld, 1999: 20]。

辺の地名、²⁹ 3) ベツレヘムの別名ないし古い名³⁰である。³¹ いずれにしても、ルツ記では両者は同一ないし類語として使用されている。³²

エリメレクは「ユダのベツレヘム出身のエフラタ人」とされているが、ダビデが「ユダのベツレヘム出身のエフラタ人」の息子とされており（サム上 17:12）、³³ ダビデとの関連を示唆する記述となっている。

さらに、エリメレクの一家が単なるベツレヘム出身の住民であるのみならず、この語を用いることで、ベツレヘムと長らく関係があったことを示唆する。³⁴

c) モアブ

「モアブ」という名詞形は 184 回、「モアブの／モアブ人の」という形容詞形は 16 回、それぞれヘブライ語聖書中に使用されている。³⁵ モアブとは、創世記 19 章の記述にあるように、ロトの娘（つまりアブラハムの姪）を先祖に持つ同族である一方、19:31－37 の記述では父親との近親相姦によって生まれた子を祖としており、偶像崇拜や性的放埒などで批判をされている（例えば、民 25 など）。このように聖書記事の多くはモアブに否定的であり、³⁶ 申命記でも「ヤハウェの会衆に加わることはできない」外国人として、アンモン人と並んでモアブ人の名前を挙げている（申 23:4）。

B. 登場人物

この場面には、エリメレク、ナオミ、マフロンとキルヨン、オルパとルツの 6 人の登場人物が存在するが、息子 2 人とその妻 2 人は、それぞれ同時に登場し、それぞれが同じ役割を担っており、特に区別はされていない。

a) エリメレク

ヘブライ語聖書中に 6 回使用される名前である。³⁷ まず 1 節で「ある男」として登場し、2 節で「エリメレク」とベツレヘム出身であること、「エフラタ人」であるという出自が紹介される。また、飢饉に際し、モアブへと避難しようとする決意し、家族と共に行動する人物でもある。

この登場人物の名前は、聖書外での言及があるにもかかわらず、聖書では唯一ルツ

29 [Cooke, 1914: 2], [Hebert, 1962: 316], [Gray, 1967: 304], [Sakenfeld, 1999: 20]。

30 [鍋谷, 1977: 157], [荒井, 2001: 314], [Reinharz, 2014: 1574], [Zakovitch, 2010: 394]。

31 [Morris, 1968: 236]。

32 [左近+木下, 1957: 252], [月本, 1998: 4, 註 5]。

33 [Campbell, 1975: 54], [柊, 1996: 478]。

34 [Berlin, 2006: 384]。

35 Even-Shoshan による。

36 [Levine, 1994: 79], [Pressler, 2002: 267]。

37 Even-Shoshan による。他方、Saxegaard は用例数を 5 回とする [Saxegaard, 2010: 61]。

38 [Cooke, 1913: 1], [左近+木下, 1957: 252], [フランシスコ会聖書研究所, 1993: 157, 註 7], [Bush,

のみに言及されるものであり、「(私の) 神は王」³⁹あるいは「王は(私の) 神」⁴⁰を意味するものである⁴¹。この名前は神がイスラエルの王であったことを示す象徴的な名前であり、⁴²宗教的な信念を表すが、⁴³神を王と頼む人物がイスラエルを捨てることは、⁴⁴自分の神と土地に不忠実であることを示す可能性もある。⁴⁵これらによって、人物名と行動の間に、意外さを生じさせている。

b) ナオミ

ナオミという人名は 21 回使用されるが、すべてルツ記での記述である⁴⁶。この名前は「甘美」⁴⁸「楽しみ」⁴⁹を意味するとされる。この場面ではまず「エリメレクの妻」として登場し(1 節)、すぐにエリメレクが「ナオミの夫」(3 節)⁵⁰へと変化している。⁵¹ただ、ここではナオミには夫や息子という男性たちとの関係で語られ、彼らが死ぬことで残される存在として描写されている。

c) マフロンとキルヨン

この二人はエリメレクとナオミの息子として同時に言及される。ヘブライ語聖書内での使用例は、前者が 4 回、⁵²後者が 3 回であり、共にルツ記のみに登場する人名である。マフロンは「病氣」⁵⁴を意味し、キルヨンは「衰弱」⁵⁵を意味するとされる。また、この二人の語尾は、韻を踏んだものとなっている。⁵⁶

このような登場人物の運命を暗示する名前が付けられていることは、物語の名前―

1996: 63]。

39 [Slotki, 1946: 42], [左近+木下, 1957: 252], [Vincent, 1958: 151], [鍋谷, 1977: 157], [Berlin, 1988: 241], [荒井, 2001: 314], [Wilch, 2001: 7], [石川, 2003: 116], [鈴木, 2009: 207], [Saxegaard, 2010: 61]。

40 [終, 1996: 478]。

41 他に、エールとメレクの両者もしくは一方を神名と解し、「(私の) エールはメレク」、「メレクは(私の) エール」、「(私の) 神はメレク」、「(私の) エールは王」、「王は(私の) エール」、「メレクは(私の) 神」などの可能性もある。Sasson はこの人物名を構成している「エリー」および「メレク」という要素を「神」や「王」としてではなく、「エール」「メレク」という神名としてとるべきだと主張する [Sasson, 1979: 17]。

42 [Berlin, 1988: 241]。

43 [Wilch, 2010: 17]。

44 [月本, 1984a: 41], [Levine, 1994: 79] を参照。

45 [Levine, 1994: 79]。

46 Even-Shoshan を参照。

47 Even-Shoshan を参照。

48 [左近+木下, 1957: 252]。

49 [月本, 1998: 4, 註 4]。

50 5 節も併せて参照。

51 [Trible, 1978: 167] を参照。

52 Even-Shoshan による。

53 Even-Shoshan による。

54 [終, 1996: 487], [荒井, 2001: 314]。他に「病弱」(石川)、「弱弱しい」(月本)とする見解もある。

55 [荒井, 2001: 314]。他に「消滅」(月本)、「脆弱」(石川)、「」(終)などとする見解もある。

56 [終, 1996: 478], [Sakenfeld, 1999: 20]。

さらには物語そのもの—が現実のものでないことを示唆する。たとえば、鈴木佳秀は生まれてくる子に「このような意味を持つ名を付けるはずがない」ことを理由に、「形成される過程でこの名が選ばれた」ことを想定する。⁵⁷

d) オルパとルツ

オルパとルツの両者ともに、ヘブライ語聖書中ルツ記のみに登場する人物で、前者は 2 回（1 章のみ）⁵⁸、後者は 12 回（1－4 章）⁵⁹に言及されている。

この二人の登場人物はマフロンとキルヨンの妻として同時に名前のみ言及される。しかし、オルパあるいはルツのいずれがマフロンないしキルヨンと結婚したのかはこの箇所からは明らかにならない。

C. 出来事と行動

この場面では語り手によって、a) 飢饉があったこと、b) 家族がモアブへと移住したこと、c) エリメレクが死んだこと、d) モアブ人の妻を迎えたこと、e) 二人の息子が死んだこと、f) 女性のみが残されたことが語られている。

a) 飢饉があった（1 節）

少なくとも士師記には、飢饉が起きたという記述がない。⁶⁰また、ルツ記でも飢饉が起きた原因や理由も言及されていない。⁶¹土地という語が定冠詞を伴っている場合、しばしばイスラエルの国土を示す表現に用いられる。⁶²このことから、この飢饉が単なる局地的なものでなく、⁶³広範囲に及ぶものであったことが示唆される。しかも穀倉地帯のベツレヘムやエフラタが飢饉となることで、⁶⁴飢饉の深刻さが印象付けられる。⁶⁵また、ヘブライ語聖書では、飢饉は神の裁きとされることが多い。⁶⁶

b) 移住

エリメレクはアブラハムやイサク、ヤコブと同じように、飢饉を避けて他国へと

57 [鈴木、2009：208]。他方、ヘルツベルクは物語の名前が架空であるという見解に反対する[ヘルツベルク、2000：552]。

58 Even-Shoshan を参照。

59 Even-Shoshan を参照。HALOT も同様。

60 [Slotki, 1946: 41], [Sasson, 1979: 15], [Levine, 1992: 79]。

61 [Gray, 1967: 304]。

62 [鍋谷、1977：156], [Sasson, 1979: 15], [月本、1984a：39], [Wilch, 2010: 5]。

63 [Leith, 2007: 392]。

64 [Leith, 2007: 392]。

65 [Sakenfeld, 1999: 19]。

66 例えば、レビ 26：19－20、申 28：23－24、王上 17：1、エレ 24：19、エゼ 6：12 など。[Leith, 2007: 392]。

「寄留する」⁶⁷。しかし、エリメレクは族長たちが向かったエジプトではなく、モアブを選ぶが、その理由は語られていない。モアブに避難した行為を批判する様子もない。⁶⁸しかし、上述のようにモアブに関しては否定的な箇所も多い。それゆえ、モアブに行くという奇妙さゆえに物語に引き込まれることになる。⁶⁹

c) エリメレクの死

エリメレクの死の原因は語られておらず、⁷⁰それがモアブへの移住と関係があるのかも明らかにされていない。⁷¹

d) モアブ人との結婚

「彼らは妻を迎えた」とあるが、この決断を誰が下したかは記されていない。しかし、この決断は、モアブへの滞在が単なる「避難」ではなく、定住の意思を有していることを表している。⁷²

e) 二人の死と女性たちのみ残される

ナオミとルツ（オルパ）にとって重大な事柄である夫／息子たちの死も事実のみ淡々と語られ、二人の死の原因は語られない。⁷³語り手は男性たちの死と女性たちが残されたことを語るのみで、三人が社会的にも経済的にもどのような状況に陥ったのかについては語っていない。

3. 単元 2 : 6 ~ 18 節

続く 6 - 18 節では、ナオミがモアブを出発しようとする際に共に行こうとする二人との間の対話を中心に物語が進行する。この場面が設定される時間・場所は共にベツレヘムへの道中となる。この場面は、登場人物の言動に注目し検討する。

A. 登場人物

この部分には、ナオミ、オルパ、ルツの三名の登場人物が登場する。

67 [石川、2003 : 115]、[Leith, 2007: 392]。

68 [Sakenfeld, 1999: 19]、[Pressler, 2002: 267]。

69 [Sakenfeld, 1999: 19-20]。

70 [Levine, 1994: 79]、[Sakenfeld, 1999: 21]。

71 [Levine, 1994: 70] を参照。

72 [鍋谷、1977 : 157]。

73 [Sakenfeld, 1999: 21]。

a) ナオミ

語り手が語らない三人の家族の原因をナオミは神に帰す。つまり、異郷の地ですべての肉親を失ったことに、ヤハウエの手を感じた。⁷⁴ ナオミは三回説得を行っている。説得の内容は、1) 母の家で安らぎを得るように、2) 自分には子どもがいないこと、3) 義姉のように自分の民と神へ帰るように、というものであった。中でも 13 節の「というのは私にはあなたたちよりも非常に苦しい」という表現で使用されている前置詞は 1) 原因を表す（あなたたちのせいで；月本⁷⁵）とも、2) 比較を表す（あなたたちよりも；新共同訳、口語訳、新改訳 2017、CEB、NIV、NJPS、NRSV など）とも理解できる。

他方、これまでの二人の行いをヤハウエのヘセドに対比させる（8 節）ほどに家族に尽くしてきたとナオミは感じている。⁷⁶

b) オルパ

二度の説得の結果、途中で帰る。オルパが帰ったことは「彼女は口づけた」という行動でのみ表されている。⁷⁷ オルパが帰ったことは、1) 素直に義母の言うことに従ったとも、2) ルツほど決意が固くないとも理解できる。⁷⁹ しかし、ここで重要なのは、語り手の語り口に非難めいた言説はない点である。⁸⁰ ルツとの対比がなされることで、⁸¹ オルパはルツの引き立て役となり、それでも説得されることなく義母について行ったルツの特異さを引き立てている。⁸²

c) ルツ

ルツはナオミに言われても諦めない頑固さも有する。オルパの名前の意味を「頑固さ」とする研究者もいるが、⁸³ 物語で（ナオミの説得にめげず貫き通すという意味で）頑固なのはルツの方である。

ルツは 16 – 17 節で詩的な表現を用いて、自らとナオミとの関係を表明する。さらに、語り手は「ルツはナオミに縋り付いていた」と述べ、創世記 2 : 24 で理想とされる夫婦の結びつきと同じ語が使用されている。⁸⁴

74 [石川、2003 : 117]。[月本、1985 : 51]。

75 [月本、1998 : 4]。他方、[月本、1985 : 50] では 2) の比較の解釈を取っている。

76 [佐々木、2012 : 167]。

77 [Cooke, 1913: 4]。

78 [鍋谷、1977 : 158]。

79 [Alter, 2015: 63]。

80 [Berlin, 1988: 241]、[ヘルツベルク、2000 : 537]。

81 [ヘルツベルク、2000 : 537]。

82 [Ska, 1990: 87]。

83 たとえば、[石川、2003 : 116]。

84 [Levine, 1994: 80]、[Linanfeld, 1999: 15]、[Sakenfeld, 1999: 30]、[Yee, 2012: 352]。

4. 単元 3 : 19 ~ 22 節

この単元では、ベツレヘムに到着したときの町の様子と、ナオミに対する反応と会話が記され、最後に語り手が二人の到着の様子をまとめて終わる。

A. 設定

①時間

語り手は二人の到着を「大麦の刈り入れの初め」(22 節)に設定する。大麦は最も収穫が早い作物とされるため、その初めとされることはこれから本格的な収穫に入ることを表している。そのため、飢饉から回復された故郷ベツレヘムへの帰還に相応しい時期であり、幸先の良さを表すだろう。

他方で、「大麦の刈り入れの初め」という表現は、ヘブライ語聖書中にもう 1 例のみあり、それはサム下 21 : 9 後半での「彼らが殺されたのは刈り入れの初め、大麦の収穫が始まるころであった」という箇所である。さらに、旧約聖書続編ユディト書 8 : 2 でも死が語られる場面で使用されている。このように、「大麦の収穫の初め」は、死と関連する。このことは、肉親に相次いで死なれたナオミには不吉なものとなるだろう。

②場所

この場面では、一貫してベツレヘムでの出来事を語るが、ベツレヘムのどこかは明らかにされない。

B. 出来事と行動

この場面では、1) 二人のベツレヘムへの到着、2) 町の興奮、3) ナオミと町の女性たちの対話、4) 語り手によるまとめが順に語られている。ここでは 3) 以外について検討したい (3) は後述)。

a) 二人の到着と町の興奮

語り手は二人が現れたことによりベツレヘムの町中が騒然としたと語るが、何に騒

85 [Cooke, 1913: 6], [フランシスコ会聖書研究所, 1993 : 163, 註 24], [荒井, 2001 : 315], [Zakovitch, 2010: 395]。

86 [Smith, 2016: 31]。

87 [フランシスコ会聖書研究所, 1993 : 163, 註 24]。

88 Even-Shoshan を参照。

89 新共同訳による。

90 [Vincent, 1958: 154] を参照。

然としたかは語られていない。可能性としては、次の4つが挙げられる。1) ナオミの風貌の変化⁹¹、2) ナオミの境遇の変化(夫・息子がいない)⁹²、3) 十年ぶりに再会を喜ぶ声⁹³、4) ナオミが見知らぬ外国人ルツを伴っていることのいずれかであるが⁹⁴、このうち4)は騒然としたベツレヘムの女性たちの発言にルツへの言及がないから可能性は低いと考えられる。

b) 二人がベツレヘムに帰ってきた

語り手は二人が帰ってきたのは大麦の刈り入れの初めであったことを語る。ナオミはベツレヘムを出てモアブに行ったので、「帰ってきた」という表現は長い時間があるとはいえナオミには適切である⁹⁵。しかし、ルツはモアブ出身の女性であるので、「帰ってきた」という表現は適切ではない⁹⁶。それゆえ、この表現は図らずもイスラエル側から出来事を見ているという語り手の視点を露にすることになるのである。

C. 登場人物の描写と言動

この場面に登場する登場人物は、ベツレヘムの女性たち、ナオミ、ルツである。

a) ベツレヘムの女性たち

この登場人物は、テキストには明記されないが、19節での「言った」という動詞の活用形が3人称女性複数となっているので、女性たちが主語だと考えられる⁹⁷。

語り手は「彼女ら」のことで町中が沸いたと語るが、女性たちが語っている相手はナオミのみであり、この場面ではルツは無視され続けるのである⁹⁸。つまり、関心はナオミにある⁹⁹。言い換えると、ベツレヘムの女性たちの関心はナオミにしかないのである。このことで、この場面での関心をナオミに集中させることになる¹⁰⁰。

b) ナオミ

ここでのナオミはベツレヘムの女性たちとの対話によって、ナオミという名は状況に合致していない¹⁰¹として、自らの不幸を表現している。しかも、その原因を語り手の

91 [Sakenfeld, 1999: 35], [Zakovitch, 2010: 394]。

92 [Cooke, 1913: 5]。

93 [Campbell, 1975: 75], [左近, 1980: 68 – 69]。

94 [Zakovitch, 2010: 394]。

95 [Cooke, 1913: 2], [Alter, 2015: 65]。

96 [Cooke, 1913: 2], [Alter, 2015: 65]。

97 [月本, 1986: 52 – 53]。

98 [Sakenfeld, 1999: 36], [荒井, 2001: 315]。

99 [Zakovitch, 2010: 394]。

100 [Zakovitch, 2010: 394]。

101 [Berlin, 1988: 241-242], [Berlin, 2006: 385]。

情報には言及されないシャッダイ＝ヤハウエに帰するのである。つまり、ナオミはシャッダイがモアブの地で災いを与えたと感じている。語り手の情報によれば、ナオミがモアブへと移動した理由は飢饉である。上述したように、聖書での飢饉はしばしば、ヤハウエの災いとして言及される。しかし、そのようなヘブライ語聖書での「常識」にも関わらず、飢饉を逃れ、モアブで滞在したことが家族に「ヤハウエの災い」をもたらしたとナオミは語っている。このことは、事実を伝えるものではなく、¹⁰²ナオミの心情を表現したものである。¹⁰³

加えて、20 節でナオミ自身が語っているように、名前の意味と現在の境遇の差を生じさせる。この自らの名前を否定するナオミの言葉には、ベツレヘムからパンがなくなったのと同様に、満ちる－欠けるモチーフが見られる。¹⁰⁴

さらに、先ほどまでの場面で何度も説得を試みあきらめて、結果、共にベツレヘムにやってきた／連れて来たルツには言及していない。¹⁰⁵

c) ルツ

この単元でのルツは、まったくの脇役になっている。ナオミやベツレヘムの女性たちの関心から外れ、語り手によってナオミと共にベツレヘムに到着したことが語られるのみである。しかも、「モアブの野」から来た「モアブの女」とルツが説明されることで、ベツレヘムでのルツの部外者としての立場が強調されており、「確実にモアブの烙印を身に帯びている」¹⁰⁶のである。¹⁰⁷

まとめ

本稿では、ルツ記 1 章を 3 つの文学単元に分け、それぞれ検討してきた。ルツ記 1 章は次のような文学的技法や含意を用いて物語を叙述している。

第一に登場人物がとる行動の意外さである。たとえば、1) 「自らの神を王」と頼むエリメレクが飢饉のゆえにベツレヘムを離れ、2) 隣国とはいえしばしば否定的な言及がなされるように、イスラエルと複雑な関係であるモアブをその避難先として選ぶのである。しかも、これらの行動は選択の理由が明示されないことで、その意外さが増すことになる。

¹⁰² [鈴木、2009：212]。

¹⁰³ [鈴木、2009：212]。

¹⁰⁴ [Berlin, 2006: 385]。

¹⁰⁵ [Sakenfeld, 1999: 36]、[荒井、2001：315]。

¹⁰⁶ [Sakenfeld, 1999: 36]、[荒井、2001：315]。[Zakovitch, 2010: 394] も参照。

¹⁰⁷ [Leith, 2007: 393]。

¹⁰⁸ [荒井、2001：314]。

第二に名前の象徴性である。¹⁰⁹たとえば、1) ベツレヘム、2) エフラト、3) エリメレク、4) ナオミの他にも、5) マフロン・キルヨン兄弟の「短命」を示唆する名前など、象徴性のある名前が選択されている。このような象徴的な意味を持つ言葉を字義的な意味としても（4の場合）、反対の意味としても（1～3の場合）使用している。

第三に登場人物の異質性と異常さの強調である。これはルツの性格描写や言動にみられる。1) ルツが「モアブ人」であることが繰り返される他、2) オルパとの対比で、ルツの行動の異常さ、普通でないことが示される。これはオルパが義母と別れて自らの国へと帰っていったことが非難されていないことから明らかになる。さらに3) 語り手がルツについて語る表現（14節）にも表されている。この表現は、創2：24での語彙を用いたものであり、ルツがナオミと（理想的な夫婦のように）密接な関係にあったことが強調されている。

第四に登場人物間の対比である。これは先ほどの1) ルツとオルパの対比の他に、2) ルツとエリメレクの間にも見られる。つまり、神を王と頼み、エフラタ出身のエリメレクが神を頼り切らず、モアブの地へと逃亡したが、モアブ人の女性が自らの神を捨ててまで、イスラエルの神を自らの神とし、義母ナオミと共に行動するのである。このようにルツと他の登場人物が対比されて描かれており、ルツの行動が強調されている。

第五に語り手の語りと登場人物の発言の差異である。これにより、当人の主観的・感情的な視点からナオミの境遇を印象付ける。これは20－21節でのナオミの嘆きに端的に表れている。語り手の情報では、飢饉を理由にモアブへ避難し、実りを得たという情報をもとにルツと共にベツレヘムに帰ったが、ナオミは「満ちていた」のに「手ぶらで帰った」と状況とは反対の表現をするのである。

第六に両義的な表現の使用である。これは「大麦の刈り入れの初め」という表現に見られた。この季節の設定は飢饉から逃れた人物のベツレヘムへの帰還に相応しく、幸先のよさを表していたが、同時にこの表現は死に関連するものとして使用されており家族に死なれベツレヘムに戻ったナオミには不吉なものとなり、両義性が見られた。

以上のように、ルツ記1章は巧みな技巧や、使用される表現が有する意味の広さと含意を積極的に使用することで豊かな物語世界を構築している。そして、聖書で語られる表現を用いながらも異なる用い方をし、あるいは、聖書での一般的なものとは異なる言動をとることで、読者の「期待の地平」¹¹⁰を裏切るのである。このことが、読者

109 [Farmer, 2003: 384], [Reinharz, 2012: 1575]。

110 受容理論の用語で、「ある特定の時代の読者が文学テキストを判断する基準」のこと。ドイツの文学理論家 H. R. ヤウスによれば、「ある時代の読者は思考方法や作品に対する姿勢や約束事などについて

をより一層、ルツ記の物語に引き付けることになるのである。¹¹¹

参考文献

- 荒井英子 (2001) 「ルツ記」、『新共同訳 旧約聖書略解』、日本キリスト教団出版局、313 – 318 頁。
- 石川立 (2003) 「ルツ記 1 章」『アレタイア』、日本キリスト教団出版局、115 – 120 頁。
- 石原千秋 (2009) 『読者はどこにいるのか—書物の中の私たち』、河出書房新社。
- 川口喬一+岡本靖正 (1998) 『最新 文学批判用語』、研究社。
- 左近淑 (1980) 「ルツ記の文学的構造と主題」、『聖書学論集』15: 62 – 94。
- 左近義慈+木下淑 (1957) 「ルツ記」、『口語訳略解』、日本基督教団出版部、251 – 256 頁。
- 佐々木哲夫 (2012) 「隣人・外国人・敵」、『旧約聖書を学ぶ人のために』、世界思想社、166 – 176 頁。
- 鈴木佳秀 (2009) 『旧約聖書の女性たち』、教文館。
- 月本昭男 (1984) 「原典講読—中級— ルツ記 (1) 1₁ – 2₂」、『聖書ヘブライ語』1: 38 – 42。
- 月本昭男 (1985) 「原典講読—中級— ルツ記 (3) 1₁₀ – 19_a」、『聖書ヘブライ語』3: 44 – 58。
- 月本昭男 (1986) 「原典講読—中級— ルツ記 (4) 1_{19 b} – 22₂₂」、『聖書ヘブライ語』4: 51 – 59。
- 月本昭男 (1998) 「ルツ記」『旧約聖書 XIII ルツ記・雅歌・コーヘレト書・哀歌・エステル記』、岩波書店。
- 鍋谷堯爾 (1977) 「ルツ記」、『新聖書注解』、いのちのことば社、151 – 160 頁。
- 終曉生 (1996) 「ルツ記」、『新共同訳聖書注解 I』、日本キリスト教団出版局、477 – 484 頁。
- フランシスコ会聖書研究 (1993) 「ルツ記」、『士師記・ルツ記』、中央出版社、145 – 177 頁。
- ジェラルド・プリンス (1997) 『物語論辞典』(遠藤健一訳)、増補版、松柏社。
- ジェラルド・プリンス (2015) 『改訂 物語論辞典』(遠藤健一訳)、松柏社。
- H. W. ヘルツベルク (2000) 「ルツ記」(森田外雄ほか訳)、『(ATD 旧約聖書注解)』、ATD・NTD 聖書注解刊行会、539 – 603 頁。
- Robert Alter (2015). “The Book of Ruth,” in: *Strong as Death Is Love: The Song of Songs, Ruth, Esther, Jonah, Daniel: A Translation with Commentary*. New York: W. W. Norton & Company. pp. 55-82.
- A. Berlin (1988). “Ruth,” in: James L. Mays et al. (eds.), *The HarperCollins Bible Commentary*. revised ed., New York: HarperOne, pp. 240-244.
- A. Berlin (2006). “Ruth,” in: Harold W. Attridge et al. (eds.), *The HarperCollins Study Bible*. revised ed., San Francisco, LA: HarperOne, pp. 382-388.
- F. W. Bush (1996). “Ruth,” in: *Ruth and Esther* (WBC). Grand Rapids, MI: Zondervan Publishing Company, pp. 1-268.
- Edward F. Campbell, Jr. (1975). *Ruth* (Anchor Bible 7). New York: Doubleday.
- G. A. Cooke (1913). “The Book of Ruth,” idem, *Judges & Ruth*. Cambridge: Cambridge University Press.

て共通のネットワークを持っていて、それによって作品を判断する」という。この判断の基準を「期待の地平」という [川口+岡本、1998: 66 – 67]。

111 文学理論家・石原千秋は「読むとき、読者はさまざまな期待を持ち、予測を立てながら読んで」おり、『期待の地平』通りに終わったとすれば「読者に新しい何かをもたらさなかったことになる。一方、『期待の地平』が裏切られたとするなら「読者に新しい何かをもたらしたことになる」と指摘している [石原、2009: 93]。

- A. Even-Shoshan (ed.), *A New Concordance of the Bible: Thesaurus of the Language of the Bible Hebrew and Aramaic Root, Words, Proper Names, Phrase and Synonyms*. Jerusalem: “Kiryat Sefer” Publishing House, 1990.
- Kathleen R. Farmer (2003). “Ruth,” in: *The New Interpreter’s Study Bible*. Nashville: Abingdon Press, pp. 383-390.
- John Gray (1967). “Ruth,” in: *Joshua, Judges and Ruth* (New Century Bible). Greenwood, SC: The Attic Press, pp.293-314.
- Andre LaCocque (2004). *Le Livre de Ruth* (Commentaire de l’Ancient Testament). Genève : Labor et Fides.
- Mary J. W. Leith (2007). “Ruth,” in: Michael D. Coogan et al. (eds), *The Oxford Annotated Bible*. Oxford University Press. pp. 391-394.
- Amy-Jill Levine (1994). “Ruth,” in: Carol A. Newsom et al. (eds.), *The Women’s Bible Commentary*. London: SPCK, pp. 78-84.
- Tod Linafelt (1999). “Ruth,” *Ruth & Esther* (Berit Olam). Liturgical Press.
- Leon Morris (1968). “Ruth,” in: A. E. Cundall & L. Morris, *Judges and Ruth* (Tyndale Old Testament Commentaries). Nottingham, UK: The Tyndale Press, pp.207-207.
- Carolyn Pressler (2002). “Ruth,” in: *Joshua, Judges, and Ruth* (Westminster Bible Companion). Louisville, KY: Westminster John Knox Press, pp.259-308.
- Adele Reinhartz (2014). “Ruth,” in: Adele Berlin et al. (eds.), *The Jewish Study Bible*. 2nd ed., Oxford: Oxford University Press, pp. 1573-1480.
- Katharine D. Sakenfeld (1999). *Ruth* (IBC). Louisville, KY: Westminster John Knox Press.
- Jack M. Sasson (1979). *Ruth: A New Translation with a Philological Commentary and a Formalist-Folklorist Interpretation*. Baltimore, ML: The John Hopkins University Press.
- Kristin Moen Saxegaard (2010). *Character Complexity in the Book of Ruth* (Forschung zum Alten Testament 2. Reihe 47). Tübingen: Mohr Siebeck.
- Jean Louis Ska (1990). “*Our Fathers Have Told Us*”: *Introduction to the Analysis of Hebrew Narrative* (Subsidia Biblica 13). Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblico.
- Judah J. Slotki (1946). “Ruth,” in: A. Cohen (ed.), *The Five Megilloth with Hebrew Text, English Translations and Commentary* (Soncino Bible). London: Soncino Press, pp. 34-68.
- James E. Smith (2016). *Gentile Widow & Jewish Queen: A Commentary on Ruth & Esther*. Morrisville, NC: Lulu.
- Phyllis Trible (1978). “A Human Comedy,” in: *God and the Rhetoric of Sexuality* (Overtures to Biblical Theology). Minneapolis, MN: Fortress, pp. 166-199.
- Albert Vincent (1958). “Ruth,” *Le Livre des Juges, le Livre de Ruth* (BJ). Paris : Les Éditions du Cerf, pp.145-164.
- John R. Wilch (2010). *Ruth* (Concordia Hebrew Reader). Saint Louis: Concordia Publishing House.
- Gale A. Yee (2014). “Ruth,” in: Gale A. Yee et al. (eds.), *Fortress Commentary on the Bible: Old Testament and Apocrypha*. Minneapolis, MN: Fortress, pp. 351-359.
- Yair Zakovitch (2010). “Ruth,” in: *The New Oxford Annotated Bible: An Ecumenical Study Bible*. Oxford: Oxford University Press, pp. 392-398.

【Abstract】

Literary Arts in the Book of Ruth Chapter 1

IWASAKI Daigo

For a long time, the Book of Ruth has been appreciated as a masterpiece of Biblical narratives by many scholars and interpreters. Especially, using a lot of literary techniques and holding relations among biblical passages, the Book of Ruth produces a rich narrative world. This article discusses literary arts of Ruth chapter 1. Firstly, this essay shows methodology and presupposition of this study. It employs two methods; the narrative criticism/narrative analysis and the reader-oriented intertextual readings. Although the narrative criticism/narrative analysis has a wide range of research content, this thesis focuses on three aspects as follows; (1) the narration and setting, in particular, the narrated time and place, (2) characters and their doings and talking, (3) the narrative events. Secondly, after dividing Ruth 1 into three literary units; vv. 1-5, vv. 6-18, and vv. 19-22, six literary conventions are discussed: (1) unexpectedness of speeches and conducts of characters; for instance, Elimelech, whose name means “my God is king,” doesn’t rely on his own God and takes refuge to Moab, an Israelite negative neighboring, (2) symbolism of characters’ name; Ruth 1 chooses symbolic names. For instance, Bethlehem, Ephrath, and Naomi are used as opposite meanings, and Naomi’s two sons’ name, Mahlon and Kilyon, symbolize their “short-lived” lives, (3) characters’ uniqueness and unusualness; (a) Ruth is called repeatedly as “Moabite.” (b) Ruth “clung” to Naomi (Ruth 1:14) as an ideal husband and wife in Genesis 2:24, (4) contrast between characters; for example, in the contrast with Elimelech, who lets his God down, Ruth makes Naomi’s God her God, (5) gaps between the narrator’s narration and characters’ speeches; for example, Naomi refers to her going to Moab to get away from hunger and returning to Bethlehem with Ruth, and says, “Though I was full when I went away, Yhwh has brought me back empty,” and (6) using ambiguous expressions; the time of the narrative, “in the beginning of barley harvest,” seems to be suitable to Naomi, who escapes from a famine. But in 2 Samuel 21:9, it is used as being related to “death.” Therefore, though Ruth 1 uses the same expressions or wordings as other biblical passages use, characters behave in other ways than those passages depict. By these literary arts, Ruth 1 betrays readers’ expectations, and all the more makes itself attractive.